

今こそ読む この1冊

潮木守一

名古屋大学・桜美林大学名誉教授

吉見俊哉 著 『大学とは何か』

(2011年 岩波新書)

知の追求メディアとしての大学

「大学とは何か」。あえてこういう問いを立てたうえで、著者は答える。「大学とはメディアである」。大学の歴史は古い。大学の原点を中世まで遡り、議論は現代のデジタル時代にまで及んでいる。いくら時代が変化し、大学の在り方が変化しても、大学はメディアだという主張が軸になっている。

もともと大学は教会の軒先を借りて、そこから始まった。学生は藁を敷いて、それに座って講義を聞いた。誰か知識を持った人がおり、それを学びたいと思う者がいれば、その場が即席の学びの空間となった。だからこの空間は移動するのが普通だった。優れた教師がいると聞けば、山河を越えて学生は移動した。教師の方も刺激的な対話ができる学生たちがいると聞けば、遠路をいとわず場所を変えた。

書籍が高価だった時代には、口から耳への伝達が、唯一のメディアであった。大学とは辻説法であり、道と道との交差点が学びの原点だった。だから教師の先祖は旅芸人だった。ただし人間は同じことを繰り返し聞いていれば飽きてくる。ましてや飽きもせず同じことを繰り返し語れる人間は、永遠に存在しない。人間の知性を蝕む最大の病原菌は、同じことの繰り返しである。だから学びとは、あくまでもその場限りの営みだった。教師も学生も、新しい知識と未知の経験を求めて遍歴の旅を続けたのは、そのためである。

しかし現代の大学は違う。広大なキャンパスを持ち、大きな図書館を持ち、精巧な実験施設を持ち、豪華な教室を持ち、最新鋭のデジタル装置を持っている。当然のことながら、これだけの装置産業を維持するには多額の経費がかかる。日本の高等教育経費がOECD加盟国のなかでは最低という事実に関心ではいられない。



知的生産の定義を問うデジタル革命

振り返ってみれば、大学はこれまで何回も危機に見舞われた。印刷革命の結果、書籍が安価に手に入る時代が到来した時、多くの大学教師は自分たちの存在意義とは何かという根源的な疑問に取りつかれた。すでに本に書いてあることを、講義室で改めて読み上げたところで、どれだけ意味があるのだろうか？ こうした悪戦苦

闘の末に辿りついた結論は、本を読み上げるのではなく、そこに書かれている知識がいかにして発見されたのか、それを超える知識はどうやったら発見できるのか、人類未踏の知識を発見する方法を伝えるのが大学だ、というアイデアだった。そうした構想のもとに、図書館を作り、実験室を作り、教師も学生もともに未知の知識を発見する方法を工夫し合い、伝え合う場となることで、危機を乗り越えようとした。しかし皮肉にも、それとともに大学は移動ができなくなり、それだけ地に足の着いた研究ができるようになった反面、マンネリが忍び寄る結果となった。

現代の大学は再びメディア革命に晒されている。それは書籍革命とは異質なメディア革命である。デジタル情報の飛び交う現代では、インターネットに接続できる環境さえあれば、図書館は不要となる。学生は今ではクラウドに貯蔵された情報をダウンロードして、レポートを「製造」する時代になった。学生のすることは教師もする。あちこちで剽窃事件、それ紛いの事件が起こるのは、しごく当然な成り行きである。ある研究業績がこれまでの水準を超えたか否かは、何を基準として判定するのだろうか？ おそらく今度のデジタル革命は、何をもちて知的生産と理解するのか、その再定義にまで及ぶことだろう。それは大学ばかりでなく、それと一蓮托生の関係にある出版業界にも、根本的な再定義を迫っている。メディア研究者として、こうした一連の問題をどう考えるのか、ぜひとも著者の続編を期待したい。